

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26293462

研究課題名(和文)慢性看護実践における事例研究法の再構築

研究課題名(英文)Reconstruction of Case Study Methodology in Chronic Nursing Practice

研究代表者

内田 雅子(Uchida, Masako)

高知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：60326494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、慢性看護実践における実践知を明らかにする事例研究法を再構築することであった。従来の事例研究法への批判と臨床現場の調査結果を踏まえ、省察的事例研究法という新たな名称のもと、認識論的立場の明確化と新たな方法論の必要性を提起した。また、実践知の熟達度と研究目的に応じて研究タイプを選択できるよう、実用的体系化を提案した。さらに、事例研究の支援方法を再考するため、専門看護師を対象とする事例研究ファシリテーター養成プログラム案、及び異分野の事例研究の支援体制に関するワークショップを開催した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reconstruct the case study methodology to clarify practical intelligence in chronic nursing practice. Based on the criticism of the conventional case study research and the findings of clinical site inquiry, as a new name for reflective case study methodology, we clarified the epistemological stance and raised the necessity of a new methodology. In addition, we proposed pragmatic systematization to allow selecting a research type according to nurses' expertise through acquisition of practical intelligence and research purpose. Furthermore, to reconsider the methods of supporting case study research, we organized workshops for a case study facilitator training program for professional nurses and a support system for case study research in different fields.

研究分野：臨床看護学

キーワード：慢性病看護学 事例研究法 実践知 省察 経験学習 ファシリテーター 研究支援体制 人材育成

## 1. 研究開始当初の背景

事例研究法やその最終産物である論文は科学的価値の観点から様々な批判を受けてきたが、その一方で、事例研究法は人間を文脈から切り離さずに現実を捉えることに優れた方法であるという評価もある。この背景には、多様な認識論的立場の相違による評価基準の混迷がある。

近年、臨床心理学、教育学、看護学など対人援助の学問分野で事例研究法に関する議論が活発にかかわられるようになった。しかし、対人援助の実践から暗黙知を発見するための事例研究方法論について詳述したテキストはみあたらない。

慢性の病を患う人々への看護は、価値観の多様化した生活に応じて専門分化した治療・ケアをコーディネートし、長い時間をかけて生活・医療の文脈に合わせた援助を判断し提供するという複雑なプロセスである。そこで培われた経験は、そのときどきの文脈に埋め込まれたまま他者には活用できない暗黙知となりやすい。

こうした実践知を明らかにするには、複雑な現象を文脈ごと、また長期的スパンで捉えうる事例研究こそが適している。事例研究論文を通じて実践知が蓄積されれば慢性看護の知の体系化にも貢献することができる。

しかしながら、看護実践を扱う事例研究の環境は、指導者もいないなか、看護実践に関する情報の質は薄くなり、個人情報保護の倫理的課題に直面するなど、より厳しさを増している。

一方、本研究者らは、慢性看護における実践知を集積し体系化するため、事例研究法の研究プロセスや論文執筆について毎年ワークショップを開催し、参加者と議論を続けてきた。しかし、ワークショップ参加者からは「事例研究法を実施したいという思いは強くなったもののひとりで論文執筆まで到達するのは難しい」といった意見が継続してみられた。

以上のことから、実践家が行う事例研究法の課題として、看護実践における事例研究法を詳細に解説した文書が少なく事例研究論文の評価基準が明らかでない、実践家は研究者と異なる研究プロセスをたどるため倫理的課題への対応が難しい、事例研究法の指導者が不足しているため実践家がひとりで自己の認識枠組みを明確化し論文執筆をすることが難しい、といった3つが明らかになった。

## 2. 研究の目的

本研究は、3つの課題を解決するため慢性看護実践における事例研究方法論を再構築することを目的とした。

理論研究：文献調査により実践知を明らかにする事例研究法の類型化、及び論文の評価基準を作成する。

比較研究：国内外・他分野の事例研究の動向調査、及び実態調査により実用的な事例研究方法論を考案する。

実践研究：事例研究を推進する場と役割のあり方を検討し、事例研究会とファシリテーター養成プログラムを試行・評価する。

## 3. 研究の方法

本研究は、次の3つの研究を並行して行った。研究メンバーは、それぞれの事例研究に関するこれまでの成果、及び専門性・経験を踏まえて、いずれかの主担当を担うと共に他の研究の副担当を担った。また、理論研究、比較研究、実践研究の3つの研究活動のプロセスと並行し、研究者全員かつ個々で事例研究を直接支援するアウトリーチ活動を展開した。

### (1) 理論研究

理論研究は、文献調査により、実践知を明らかにする事例研究法の類型化、評価基準の前提となる認識論的立場の明確化、認識論的立場と整合性のある新たな方法論の検討等を実施した。

### (2) 比較研究

比較研究は、最も事例研究法が発展している分野の専門家へ事例研究の課題と方策についての聞き取り調査、ワークショップにおける他分野の専門家の招聘講演の開催、ワークショップ参加者への事例検討と事例研究の経験や意識に関するアンケート調査、事例研究論文の筆頭著者への面接調査、事例研究の組織的方策を推進する看護管理者への面接調査、実践家に向けた事例研究方法論の実用的体系化案の作成等を実施した。

### (3) 実践研究

実践研究は、事例研究を推進する組織的方策の検討を目的として、事例研究会のプログラム案とファシリテーター養成プログラム案の作成、事例研究のネットワークづくりのためCNS研究会や学会におけるワークショップ開催やホームページ作成、事例研究会の題材論文の公募等を実施した。

### (4) アウトリーチ活動

上記3つの研究活動の成果を、学会における事例研究支援や実践家の事例研究支援として実施した。

## 4. 研究成果

本研究の目的は、慢性看護実践における実践知を明らかにする事例研究法を再構築することであった。研究者らのこれまでの成果を踏まえて、実践知を明らかにする事例研究法を再構築するため理論研究、比較研究、実践研究の3つを基軸にアウトリーチ活動を展開した。

理論研究は、従来の事例研究法への批判と臨床現場の調査結果を踏まえ、省察的事例研究法という新たな名称のもと、認識論的立場の明確化と実践家が自身の実践知を明らかにするための新たな方法論の必要性を提起した。

さらに、実践知の熟達段階に応じて、省察的事例研究法の実用的体系化を試みた。

比較研究は、事例研究論文の筆頭著者、及び看護管理者の面接調査結果から、省察的实践における経験学習の意義、ならびに事例研究による組織学習の意義を明らかにした。また事例研究を用いた組織的方策は、看護師の省察的实践を支援する組織風土を形成し、看護の質に寄与することが示唆された。

一方、事例研究を中心に学問的發展を遂げてきた日本心理臨床学会における事例検討会や事例研究を中心にして専門家の熟達を支援する体制に学び、他の看護系学会では例をみない事例発表スタイルを取り入れ、ワークショップを開催し参加者らと意義や課題について議論した。

実践研究は、慢性疾患看護専門看護師を対象に省察的事例研究のファシリテーター養成プログラムの試案を用いて、事例研究会における支援の妥当性を評価した。

また、研究メンバーは前述した研究成果を活用し、それぞれの関連施設や学会等で省察的事例研究法に関する講演会や看護師の事例研究支援を実践し、支援方法の課題を検討した。

#### (1) 理論研究

理論研究は、看護実践に関する事例研究法を詳細に解説した文書が少ないことから臨床心理学や教育学における文献調査を中心に行った。

まず、実践知とは暗黙知であり、実践家が特定の状況・文脈において身体を通して体験された知覚・認知(思考)は、状況・文脈に依存するため、言葉にしなればそのまま状況や文脈と一体化したまま、意識化されなくなる。こうした暗黙知を言葉として掘り起こすためには、実践家が自身の認知をメタ認知あるいはリフレクションする批判的思考力などの省察的思考が必要である。つまり、実践知を明らかにする事例研究とは、実践した当事者が経験を振り返ることを前提とし、経験を retrospective にリフレクション(省察)し記述する質的研究である。

次に、慢性看護実践の事例研究の認識論的立場は、臨床で生起する患者と看護師の交流を捉え、かつ実践経験の蓄積を必要とする「臨床の知(中村, 1992)」が妥当であり、実践的認識論と整合することの重要性を提起した。実践家が研究の目的とは、実践の改善への貢献である。実践家が自身の実践経験を省察する研究の基盤として、日々の看護実践が「行為の中の省察(Shön, 1983)」という認識論のもとに展開されている必要がある。

こうした実践と研究を結ぶ認識論は、自らの経験を省察することにより省察知、実践知を生み出すという立場である。一方、事例研究法という一般的・汎用的な名称では、上記のような目的や方法は覆い隠されてしまうため、認識論的立場を明確にした新たな方法論

の名称が必要であった。そこで「省察的事例研究法」という名称を提起した。

そして、省察的事例研究法においては、実践家かつ研究者の認知へのアプローチするため、従来の2人称・3人称研究に加えて1人称研究の必要性を提起した。1人称研究によって、体験した当事者が自身の認知にアプローチして言葉にする方法こそが、暗黙知を掘り起こしていく最適な研究方法である。こうした研究プロセスについて、経験学習とリフレクションの観点からの定式化を試みるとともに、実践知の熟達段階に応じて、省察的事例研究法の類型化を試み、検討結果を公表した。

#### (2) 比較研究

比較研究は、事例検討会と事例研究会の比較、及び倫理的配慮の論点と方策を検討するため心理臨床分野の事例研究法に精通した専門家を招聘してワークショップを開催した。事例研究法を中心に学問的發展を遂げてきた日本心理臨床学会の事例研究を支援する体制に学び、慢性看護分野の学会に必要な支援体制を検討した。その結果、他の看護系学会では例をみない事例発表スタイルを取り入れ、ワークショップを開催した。ワークショップ参加者と新たな演題発表スタイルの意義と課題について議論した。

次に、実践家は研究者と異なる研究プロセスをたどるため倫理的課題への対応が難しいことから、事例研究論文の筆頭著者へ看護実践における事例研究プロセスの困難と倫理的課題に関する面接調査を実施した。調査結果から、事例研究を推進する医療施設の組織文化の特徴が浮かび上がった。そこで、事例研究論文の筆頭著者の所属施設における看護管理者を対象に事例研究による人材育成の組織的方策と課題について面接調査を実施した。

前述の面接調査結果から、省察的实践における経験学習の意義、ならびに事例研究による組織学習の意義が明らかになった。また事例研究を用いた組織的方策により、看護師は理論を用いた省察的思考を継続的に訓練し、対話を通して何重にも実践を省察する仕組みとメタ省察の連鎖を生み出していた。事例研究を活用した組織的方策は、看護師の省察的实践を支援する組織風土を形成し、看護の質に寄与することが示唆された。

これらの知見や毎年開催するワークショップ参加者の意見やアンケート調査等を踏まえて、事例検討会と事例研究会のファシリテーターに求められる資質と役割について検討するとともに、実践家のための実用的な事例研究法の体系化を考案し、その結果を公表した。

#### (3) 実践研究

実践研究は、事例研究会プログラム案、及びファシリテーター養成プログラム案を検討するにあたり、事例研究プロセスにおける効果的な事例検討会運営と研究支援の方法を明らかにするための調査を実施した。事例研究

法を推進する事例研究会の果たす役割を明らかにするため、慢性疾患看護専門看護師を対象とする事例研究会を計3回開催し、それぞれの事例について討議を重ねた。その全プロセスについてデータ収集し、データの厚みへの方略、研究課題の明確化を促進するための支援方法、ならびに事例研究会の効果的な運営方法について分析した。

そして分析結果から導いた事例研究会のファシリテーター役割・機能について、国際学会で発表した。さらにその結果を踏まえて、国内の慢性疾患看護専門看護師を対象に省察的事例研究のファシリテーター養成に関するワークショップを開催し、参加者と慢性看護における事例研究への期待と困難、及び方策についてグループディスカッションを行った。その後、慢性疾患看護専門看護師を対象に省察的事例研究のファシリテーター養成プログラム試案について、事例研究会における研究論文までの支援プロセスの妥当性を評価した。

#### (4) アウトリーチ活動

研究メンバーらは前述した研究成果を活用し、それぞれの関連施設や学会等で事例研究法に関する講演会や看護師の事例研究支援を実践した。また、支援方法の課題を共有・検討するとともに、それぞれの研究活動へ還元した。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 23 件)

内田雅子 (2018). 看護実践における省察的事例研究法の認識論的立場. 看護研究, 51(3), 195-201.

内田雅子, 小長谷百絵, 木下幸代, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 黒江ゆり子 (2018). 事例研究と省察的看護実践の循環 事例研究論文の筆頭著者と看護管理者への面接調査から. 看護研究, 51(3), 202-210.

内田雅子, 小長谷百絵, 木下幸代, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 黒江ゆり子 (2018). 事例研究を用いた看護師育成の組織的方策の意義 省察的実践の支援に焦点をあてて. 高知県立大学紀要看護学部編, 67, 1-17. 査読有

<http://id.nii.ac.jp/1299/00000967/>

黒江ゆり子 (2018). 看護学における質的記述的事例研究法の進化 - 質的記述的事例研究法の考え方と特性. 看護研究, 51(3), 188-194.

小長谷百絵 (2018). 質的記述的事例研究法における倫理的課題を考える. 看護研究, 51(3), 242-247.

伊波早苗 (2018). 質的記述的事例研究の実際 2 ステイグマにより自尊感情の低下した糖尿病患者の自己コントロール感を取り戻す看護. 看護研究, 51(3),

235-241.

山本力 (2018). 心理臨床学と「事例」に基づいた研究. 看護研究, 51(3), 211-216.

河口てる子 (2018). 看護学における事例研究法の今後の展望. 看護研究, 51(3), 248-251.

東めぐみ, 伊波早苗 (2018). 事例報告から事例研究へ 質的記述的事例研究の組み立て. 看護研究, 51(3), 217-227.

東めぐみ (2018). 質的記述的事例研究の実際 1 透析療法を患者が自立して導入するまでの待つ看護. 看護研究, 51(3), 228-234.

小松由子, 内田雅子 (2018). 向老期に2型糖尿病を発症した女性における病いの捉え方と自己管理の相互作用. 高知女子大学看護学会誌, 43(2), in press. 査読有

伊波早苗 (2018). 1型糖尿病患者の療養指導における患者と看護師の「協働的パートナーシップ」. 日本慢性看護学会誌, 12, in press. 査読有

東めぐみ (2018). 糖尿病性腎症患者の療養行動を支えた「待つ看護」. 日本慢性看護学会誌, 12, in press. 査読有

内田雅子, 山本力, 黒江ゆり子, 小長谷百絵, 木下幸代, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 東めぐみ, 伊波早苗, 長谷佳子, 河口てる子 (2017). 慢性看護実践における省察的事例研究法の実用的体系化. 高知女子大学看護学会誌, 43(1), 130-139. 査読有

内田雅子, 小長谷百絵, 木下幸代, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 黒江ゆり子 (2017). 慢性看護実践における事例研究の困難と価値 事例研究法の意義に焦点をあてて. 高知県立大学紀要看護学部編, 66, 1-12. 査読有

<http://id.nii.ac.jp/1299/00000411/>

小長谷百絵, 内田雅子, 古江知子, 木下幸代, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 黒江ゆり子 (2017). 看護実践における事例研究の困難と意義. 上智大学総合人間科学部看護学科紀要, 2, 23-29. 査読有

<http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20170622003>

黒江ゆり子, 山本力, 内田雅子, 木下幸代, 小長谷百絵, 伊波早苗, 東めぐみ, 森田夏実, 長谷佳子, 段ノ上秀雄, 河口てる子 (2017). 自己の実践を振り返る '事例研究 Case Study Research' の在り方 - 心理臨床学における思索と方法論に学ぶ -. 日本慢性看護学会誌, 11(1), 46-51. 査読有

黒江ゆり子 (2017). 看護学における質的事例研究法の特性に関する論考 - クロニックイイルネスとしての糖尿病に関する質的事例研究に焦点をあてて. 岐阜県立看護大学, 17 (1), 147-152. 査読有 DOI: 10.24481/00000094

黒江ゆり子 (2017). 看護実践研究の意義と方法. 看護研究, 50(6), 520-526.

黒江ゆり子 (2017). 看護学における事例研究法の意義と可能性. 看護研究, 50(5), 406-417.

- 21 山本真矢, 木下幸代 (2017). 糖尿病合併症が進行した独居男性に対するその人のもてる力を生かしたセルフケア支援. せいれい看護学会誌 7(2), 1-6. 査読有

- 22 黒江ゆり子, 藤澤まこと (2016). 慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法の意義と方法についての論考. 岐阜県立看護大学紀要, 16(1), 105-111. 査読有 DOI: 10.24481/00000043

- 23 内田雅子, 伊波早苗, 小長谷百絵, 東めぐみ, 木下幸代, 黒江ゆり子 (2014). 実践知の集積を目指して 事例研究法の具体的プロセスを探る. 日本慢性看護学会誌, 8(2), 71-76.

〔学会発表〕(計 17 件)

内田雅子, 黒江ゆり子, 東めぐみ, 伊波早苗, 長谷佳子, 木下幸代, 小長谷百絵, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 河口てる子 (2017). 心理臨床学に学ぶ事例研究法その 3 慢性看護実践の事例研究を支援する事例発表スタイルの検討. 第 11 回日本慢性看護学会学術集会.

黒江ゆり子, 伊波早苗他 (2017). 新たなデザインとしての事例研究法について 事例検討会からケース・スタディ・リサーチへ進めよう. 第 23 回日本看護診断学会学術大会.

大川眞智子, 黒江ゆり子他 (2017). 実践の質向上を可能にする看護における実践研究の特性. 第 37 回日本看護科学学会学術集会.

Sanawe Iha, Megumi Higashi, Yoshiko Hase (2016). Facilitation to promote the case study process to clarify the research question. The 9th ICN INP/APN Network Conference 2016.

Megumi Higashi, Sanawe Iha, Yoshiko Hase (2016). Facilitation to promote the case study process 2 Questions for writing a thick description through the narrative the case study sessions. The 9th ICN INP/APN Network Conference 2016.

Yoshiko Hase, Sanawe Iha, Megumi Higashi (2016). Facilitation to

promote the case study process: Identification of issues related to managing case study groups and resolving resource needs of a group of Clinical Nursing Specialists. The 9th ICN INP/APN Network Conference 2016. 内田雅子, 黒江ゆり子, 東めぐみ, 伊波早苗, 長谷佳子, 木下幸代, 小長谷百絵, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 河口てる子 (2016). 心理臨床学に学ぶ事例研究法その 2 慢性看護実践における retrospective な事例研究の位置づけと具体化. 第 10 回日本慢性看護学会学術集会.

高山望, 木下幸代 (2016). 高次脳機能障害者と家族に対する目標指向的アプローチを活用した看護. 第 10 回日本慢性看護学会学術集会.

清水敬子, 東めぐみ (2016). 療養指導中断に至った糖尿病患者への看護実践を振り返る リフレクションから得た学び. 第 21 回日本糖尿病教育・看護学会.

東めぐみ (2016). 事例研究におけるデータ収集と分析 言葉によって実践した世界を描き出す. 第 21 回日本糖尿病教育・看護学会.

伊波早苗 (2016). 事例研究が臨床を変える: スティグマを持つ糖尿病患者への支援 事例研究に取り組むことで見える看護. 京都大学看護研究交流集会.

伊波早苗 (2015). 事例報告から事例研究へ あなたの研究をワンランクアップ. 第 20 回日本糖尿病教育・看護学会.

伊波早苗 (2015). 実践知を紡ぐ 事例に基づく看護の可視化 看護の思考と患者の反応からの学び 事例を振り返るプロセスを通して. 第 20 回日本糖尿病教育・看護学会.

黒江ゆり子, 小長谷百絵, 森田夏実, 伊波早苗, 河口てる子, 木下幸代, 段ノ上秀雄, 長谷佳子, 東めぐみ, 内田雅子 (2015). 臨床心理学における事例研究法に学ぶ 自己の実践を振り返る事例研究の考え方と方法. 第 9 回日本慢性看護学会学術集会.

齊田良恵, 森田夏実 (2015). 訪問看護師が看取り後のグリーンケアとして家族介護者の語りを聴くことの意味 事例研究. 第 5 回日本在宅看護学会.

高山望, 木下幸代 (2015). 高次脳機能障害における「記憶障害」に対する代償手段の獲得のための看護. 第 9 回日本慢性看護学会学術集会.

黒江ゆり子, 内田雅子, 伊波早苗, 木下幸代, 小長谷百絵, 東めぐみ (2014). 実践知の集積を目指して 事例研究法の具体的プロセスを探る. 第 8 回日本慢性看護学会学術集会.

〔その他〕

(1) アウトリーチ活動

内田雅子・看護研究：事例研究・高知赤十字病院看護部・2018年4月～継続中。  
伊波早苗 第1～4回「ケーススタディ」・草津看護専門学校・5月～継続中。  
森田夏実・ケーススタディ・東京女子医科大学看護学部認定看護師教育センター・1月。  
森田夏実・ケーススタディ・埼玉石心会病院看護部・2018年1月～継続中。  
森田夏実・看護研究：ケーススタディ・湘南中央病院看護部・2018年3月～継続中。  
森田夏実・看護研究：ケーススタディ・医療法人社団松和会看護部。  
内田雅子、黒江ゆり子、東めぐみ、小長谷百絵、伊波早苗・事例研究ワークショップ「CNSが行う事例研究ファシリテーション」上智大学四谷キャンパス・2017年2月。  
内田雅子・看護研究：事例研究・高知赤十字病院看護部・2017年4～12月。  
伊波早苗 第1～5回「ケーススタディ」・草津看護専門学校・2017年4～5月。  
森田夏実・ケーススタディ・埼玉石心会病院看護部・2017年3～12月。  
森田夏実・看護研究：ケーススタディ・湘南中央病院看護部・2017年3月～2018年1月。  
森田夏実・看護研究：ケーススタディ・医療法人社団松和会看護部・2017年5～11月。  
内田雅子・エキスパート研修「看護研究論文（症例研究を含む）の書き方」高知県看護協会・2016年6月。  
内田雅子・看護研究：事例研究・高知赤十字病院看護部・2016年4～12月。  
黒江ゆり子・第1～3回「事例報告と事例検討」・岐阜県立看護大学看護実践研究指導事業「利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援」退院支援教育プログラム研修 アドバンス研修・2016年8～11月。  
森田夏実・看護研究：ケーススタディ・湘南中央病院看護部・2016年3月。  
森田夏実 第1～4回「ケーススタディ」・埼玉石心会病院看護部・2016年5～12月。  
内田雅子・エキスパート研修「看護研究論文（症例研究を含む）の書き方」高知県看護協会・2015年5月。  
森田夏実・看護研究：ケーススタディ・湘南中央病院看護部・2015年3月～2016年1月。  
伊波早苗、木下幸代、小長谷百恵、東めぐみ、内田雅子・看護実践における事例研究・四国大学附属看護学研究所学術講演会（招聘講演）・2014年12月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内田 雅子 (UCHIDA Masako)  
高知県立大学・看護学部・教授  
研究者番号：60326494

(2) 研究分担者

黒江 ゆり子 (KUROE Yuriko)  
岐阜県立看護大学・看護学部・学長・教授  
研究者番号：40295712

木下 幸代 (KISHITA Sachiyo)  
聖隷クリストファー大学・看護学部・特任教授

研究者番号：00095952

小長谷 百絵 (KONAGAYA Momoe)  
上智大学・総合人間科学部看護学科・教授  
研究者番号：10269293

伊波 早苗 (IHA Sanae)  
滋賀医科大学・医学部看護学科・客員准教授（慢性疾患看護専門看護師）

研究者番号：30437123

(3) 連携研究者

山本 力 (YAMAMOTO Tsutomu)  
就実大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号：30127732

森田 夏実 (MORITA Natsumi)  
東京女子医科大学・看護学部認定看護師教育センター・非常勤講師

研究者番号：90229310

段ノ上 秀雄 (DANNOUE Hideo)  
和洋女子大学・看護学部・講師  
研究者番号：40555596

河口 てる子 (KAWAGUCHI Teruko)  
日本赤十字北海道看護大学・看護学部・学長・教授

研究者番号：50247300

(4) 研究協力者

東 めぐみ (HIGASHI Megumi)  
東京都済生会中央病院・看護部・副看護部長（慢性疾患看護専門看護師）  
研究者番号：

長谷 佳子 (HASE Yoshiko)  
北海道医療大学病院・看護部・看護師（慢性疾患看護専門看護師）

研究者番号：70583699